

○招待講演

『“辨證論治”概念的再釐清與其發展願景』

講師：林伯欣

雖然「辨證論治」四字明確出現於中醫典籍是清朝才有的事（《醫門棒喝·卷三》），但是早在2500年前開始，這個觀念與原則已是歷代眾多高明醫者認定的臨床診察標準。現代中醫師對於「辨證論治」的觀念雖然朗朗上口，但許多醫者在實際操作上並不詳細深入、甚至僅流於形式，離精準還有一段距離，這使得古典中醫學在臨床上的真實療效不易再現，也導致一般人對古典中醫產生越來越多的偏見。

「辨證論治」的臨床真義並非單純找出一組共同存在的聯合症狀、或是僅針對於某一個（或幾個）特有的症狀來作判斷，然後就對應到特定的處方給予治療。「辨證論治」是一個原則性的名詞，「辨」是明察與判別，「證」則是憑證與通知，臨床診斷操作的重點在於「完整蒐集的證」與「詳實細膩的辨」之間做緊密連結。「辨證」要完整精確，必須建構於四診的整合、生理病理知識的嫻熟、以及病因病機的串連研判，然後才能決定治療方法。這個診療過程不僅內科醫師應該遵守，針灸科醫師或骨傷科醫師也應該如此。

要使古典中醫的診療成果能夠有穩定性與再現性，醫者必須有能力收集病患的各種生命現象與資訊、熟悉中醫生理病理知識、能夠察覺病患顯性與隱藏的病證、考量時間空間與環境因素的影響、並串連起在病患身上的病因病機。當醫者面對從未見過的疾病或症狀，在進行思考、分析、判斷與治療中，藉由這樣的操作過程，才得以有嚴謹縝密的邏輯與證據可依賴，不至於盲目誤診誤治，這也正是古典中醫理論在實際應用上的珍貴之處。

「辨證論治」並非只是做簡單與粗糙的分類歸納就斷然治療，更不是事先設計一套規則與對照表加以套用。從診察到分析，從思辨到決策，目前的中醫臨床診療究竟還有哪些問題待處理？未來古典中醫診治方式的趨勢與希望在哪裡？做為執行者的醫者需具備什麼條件才能適切的展現古典中醫的真正特色？

本次的演講，我將要試圖討論這些問題。

『“辨證論治” その概念の再認識および未来展望』

翻訳：郷家 明子

清朝時代より「辨證論治」この四文字は古典中医の書籍にみとめられるようになったが、もともと 2500 年前から存在し、歴代の高名な中医師は臨床診察における標準的な概念および原則として認識していた。現代の中医師は「辨證論治」の概念をよく言葉にするが、実際のところその使用法に関しては深く詳細な検討をせず、形式的で精確さからかけ離れており、臨床における古典中医の治療効果を再現出来ていない。そのため古典中医の治療効果は一般の人々からますます偏見の目で見られるようになった。

「辨證論治」の臨床真義は、同時期に現れる症状の組み合わせから判断するという単純なものでは無く、また 1 つの（あるいはいくつかの）特有の症状からそれに対応する特定の処方を使って治療するものではない。「辨證論治」は原則性を表す名詞であり、「辨」は明察および判別を意味し、「證」は証拠および通知であり臨床診断の重点である「万全に揃えた證（証拠）」と「きめ細かく詳細な辨（判別）」は緊密に連携している。「辨證」は完全に精確である必要があり、四診によって得られた情報と、生理学および病理学の熟練した知識を整合して病因病機を検討したうえで、治療方法を決定する。この診療工程は中医の内科医師のみならず、鍼灸科や骨傷科の医師も遵守すべきである。古典中医の診療成果が安定性と再現性を持つのは、医者が患者の各種生命現象と情報を正確に収集し、中医の生理病理に熟知し、患者の顕在的および潜在的な病證を感知し、時間空間環境因子の影響を考慮し、患者の身の上で起こった病因病機を連想する能力がなくてはならない。

医者が未だ見たことのない疾病や症状に遭遇した時は、思考、分析、判断、治療に至る上で、上記の思考過程を用いることにより、盲目的な誤診誤治に至らず、緻密できめ細かい論理と裏付けに頼ることができる。これこそ正に古典中医理論が実際の臨床応用の場において貴重である所以である。

「辨證論治」は断じて簡単で粗造に集約された分類による治療では無く、さらにあらかじめ決められた規則や比較表をあてはめるものではない。診察から分析に至るまで、思弁から意思決定に至るまで、目前の中医臨床診療は一体あといくつの問題を処理しなくてはならないのだろう。未来における古典中医診療方式の趨勢と希望は何処にあるのだろう。古典中医の真の特色を適切に打ち出すにはそれを使う医者がどんな条件を兼ね備えれば良いのだろう。

今回の講演ではこれらの問題について検討したいと思う。